

こどもの感性と創造性を育む 五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発

代表者：鈴木光男（国際教育学部）

協力者・連携機関：坂田芳乃（アルテ・プラサ） 住麻紀（アルテ・プラサアーティスト） 松井兎子（アルテ・プラサアーティスト） 木村由美子（三島市文化振興課主事） 渡部碧唯（清水町社会教育推進係主事） 算有子（浜松学院大学准教授） 藤田雅也（静岡県立大学短期大学部教授） 島口直弥（浜松市美術館 指導主事） 青木明子（こどもアーツスタジオプロジェクト 主宰） 渡川智子（ヴァンズ彫刻庭園美術館 学芸員） 楡木令子（Elm Art Planning 主宰）

【経緯】近年、発達に課題や障がいを抱える子どもが増加している。そのような子どもたちの多くが感覚統合の課題を抱えている。また、学習障害・発達障害といった課題を抱えていない子どもたちでも、五感を通じた感性や感覚の表は各種の報告でも明らかにされている。こうした状況もあり、アーティストと子どもたちを出会わせ、心震わせられるような活動を展開したり、まちづくりとしても意義ある企画や事業を学生を巻き込んで地域住民や地元の特設支援学校の児童・生徒、あるいは高校生などといっしょに展開したりすることで、昨年度までの取り組み以上の広がりある展開を拡充・発展させていきたい。

【目的】これからの変化の大きな時代を生きる子どもには、「何かを生み出した表現したりする、新しいものを創り出す創造性」が強く求められる。しかし、生成AIの登場にも象徴されるように間接的な体験が増え、直接感覚を刺激する機会は減少している。こうした中、次代を担う子どもたちに、アーティストと出会わせ、感性と創造性を育む環境・機会を提供し、体験を通じて表現し対話することにより、様々な見方があることを知ると同時に自由に独創的な発想を育み、将来の多様な世界への視野を広げられるよう、未来の人づくりを応援しようとするものである。

【期待される効果・成果】普段はあまり接することのないアーティストと関わり、非日常的な活動や企画を提案されることで、子どもたちの感性や創造性は大きく揺さぶられる。そのような活動を共にする学生や地域住民にも大きな影響を与えるものである。それは昨今話題となっているコミュニティデザインや地域起こし、まちづくりにつながるものである。また、外部の団体やアーティストと共に活動することで、協働・参画する学生たちの意識が保育者・支援者・教育者として転換していくことも期待できる。

【事業概要】2021年度からアルテ・プラサ（協力団体）主催の「感覚を活かしたこどもの表現活動としてのアートプログラム」を協力者とともに開発する研究会を開催し、事例を基にアートプログラムの開発とモデル事業を実施してきた。昨年度は本地域連携事業費の助成を受けて、活動・研究の輪を広げながら進めてきた。2023年度は、ここまでで得られた知見をもとに、学生も参画し、さらに近隣の地域や学校に根差した様々な美的経験を軸とした企画や事業を展開するようになった。

【実施内容】

1. アルテ・プラサの活動（左写真はテラシ） 講師：楡木令子（美術家） 「アート寺子屋〜みて、きて、さわって、つくっちゃおう〜」きく・さわるアート編

日時：2023年7月30日（日） 会場：三島市生涯学習センター多目的ホール

日時：2023年10月7日（土） 会場：市之瀬ヴィレッジ

本活動では企画の段階で関わるので、当日は協力が一般参加者に交じって親子で参加した。

2. 学生や地域との協働・連携

①県立浜松みをつくし特別支援学校シャッターアート事業

シャッターアートプロジェクト委員会が設立され、毎月第4金曜日に委員会が開催された。この委員会には、管理職（渉外・書類申請・連絡調整）、図書芸術課（制作活動・児童生徒の教育活動計画）、小中高各学部（学習集団の割り振り、指導）、総務課（保護者作業の協力依頼）、地域連携課（交流及び共同学習における活動相談）が属し、本地域連携事業の代表者、協力者も折に触れて関わり、このシャッターアート事業進められていった。

- ◆準備期（4～5月）※洗浄と製作計画
- ◆製作期（6～10月）※背景色塗り・背景色塗りデザイン下書き→本塗
- ◆発表期（11月はまみゆめウィーク）



本事業は、児童生徒の創造性や表現力を育むこと、地域との交流を深めることを目的として実施された。開校間もない特別支援学校にとっては、地域に根差し、地域住民に知ってもらうこと・関心を寄せていただくことが何より大切なことであったから、シャッターアート制作には、保護者や地域住民も参加した。完成後、保護者や地域住民から「学校が明るくなった」「地域が元気があった」などの声が寄せられた（写真1.2.3）。



②静岡県磐田市中東地区ビタミロードシャッターアートプロジェクト

磐田駅の西に位置するビタミロードのシャッターアート事業は、2021年 IV 高校グループ「アイカツ」が提案した『人が集まる磐田をつくります！～自慢したくなるまち～』がもとになっている。かつてはにぎわいを見せていた商店街だったのだが、近年はシャッター商店街となっている。そこで、高校生の「シャッターアート事業を展開しシャッター商店街の活性化を目指す！」という提案のもと、同じ思いを持つアーティストと市内3校の高校美術部とで共同して本事業を進めるように体制を整えた。実際の作業には地域住民（中東地区地域づくり協議会メンバー、自治会役員）と本学学生が関わり、シャッターアート制作が進められた（写真4～6）。

また、2023年度末の3月にはここまで高校生と関わってきた鈴木海斗氏（GOLDEN JUNK 代表アーティスト・東京ヴィジュアルアート専門学校非常勤講師）によるシャッターアートが進められ、本学学生も作業に加わり4月上旬に完成させた（写真7・8）。

下の図1は、ビタミロードシャッターアート事業を通して浮き彫りとなった課題をもとに、対話・共有・交流を位置づけたものである。地域づくり協議会と制作担当する高校生、そして関係する自治会役員・住民間で、シャッターアートの目的や意義について対話を重ね、共有し、展開過程で高校生とシャッター提供者など住民が交流することをイメージした。この事業の中心になって動くアーティストの存在は大きく、今後さらにアートを中核とした地域活性化を推進する際のポイントとなるものと言えるだろう。

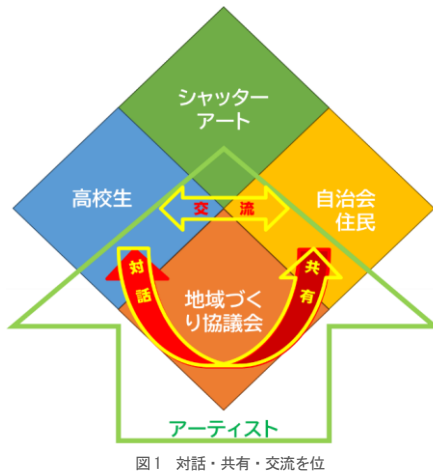


図1 対話・共有・交流を位



写真9 『手でふれてみる世界』上映会チラシ

3. 美術館等との連携・協働

静岡県長泉町にあるヴァンズ彫刻庭園美術館（現在は閉館。静岡県の文化拠点施設として再開準備中）の元副館長 岡野晃子氏が監督・制作した映画『手でふれてみる世界』は、イタリアにあるオメロ触覚美術館を紹介する映画である。この美術館は、見えない人も見える人もすべての人が訪れ作品鑑賞できる美術館である。まさにイタリアのインクルーシブとダイバーシティに裏付けられた美術館と言える。この映画の上映会と監督の岡野晃子氏のトークショーなど、以下の日程で開催した。

- 『手でふれてみる世界』上映会
- ・日時：2024年2月25日（日）13:00～16:00
- ・場所：磐田市「ひと・ほんの庭にこっと」
- ・日程：13:00～14:00 映画『手でふれてみる世界』
- 14:15～15:15 監督・岡野氏トークショー
- 15:30～16:00 触覚ワークショップ&交流会

「触覚ワークショップ」は、石彫作家でもある藤田雅也氏（静岡県立大学短期大学部教授）と、上述のシャッターアートにご協力いただいた鈴木海斗氏、磐田市在住陶芸家 川合純也氏（むみやう焼き）それぞれの作品に触って鑑賞するワークショップであった。全員がアイマスクで視覚を閉ざした中で鑑賞するワークショップは、刺激と学びに満ちた企画となった。

【成果と課題】

本事業のテーマ「こどもの感性と創造性を育む五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発」として、今年度は特別支援学校や商店街とアーティストをつなげるシャッターアート事業や、美術館と子ども・学生・地域住民と関わる上映会・触覚ワークショップを展開した。それぞれの事業で美しさと楽しさと共感と軸に据えた人々の交流を創出することができた。

今回の一つ一つのアートプログラムの試みをもとにして、2024年度は新たに地元中学生と商店街・地域づくり協議会が協働するシャッターアートを計画している。また、スクールミュージアムとして、小学校内に美術館を期間限定で設置し、その場でアーティストとの交流をはかる事業も予定されている。本学の地域連携事業費により、こうして県内の（一部県外の美術関係者）とも連携・協働して少しずつ事業が拡充発展できていることをありがたく思う。なお、ここでのシャッターアートに関する事業は、「こどもの感性と創造性を育む五感を通じた美的経験によるアートプログラム開発Ⅱ-特別支援学校と磐田市でのシャッターアート事業報告」（『聖隷国際教育研究』第1号、聖隷国際教育学会、2023年3月31日発行）にて報告したものである。



写真10 アイマスクを着けての移動



写真11 石彫作品触察



写真12 シリコン作品触察

「こどもの感性と創造性を育む五感を通じた美的経験によるアートプログラム開発Ⅱー特別支援学校と磐田市でのシャッターアート事業報告ー」→
『聖隷国際教育研究』第1号、聖隷国際教育学会、2023年3月31日発刊

